

葉衣觀自在の図像

佐久間留理子

(名古屋大学)

1 はじめに

古代インドには、山や森といった大自然の中でくらす、アータヴィカやシャバラ等と呼ばれる非アーリア系の種族がいた。前者は森林において狩猟採集生活をおくる人々であったが、しばしば略奪者、破壊者となり人々を襲ったため非常に恐れられ、彼らを懐柔する政策がとられた程であった⁽¹⁾。また後者は中部インド及びデカン地方に住む山地種族であり、卑賤な人々とみなされていたようである。これらの種族は古代インドのヴァルナ制度ではその枠外⁽²⁾か、あるいは、その下部組織に置かれ⁽⁴⁾、アーリア社会に属さないものとして、ヒンドゥー正統派にとっては否定的な意味をもっていたと考えられる。

その一方で仏教は、これらの種族の人々や彼らのイメージを自らの中に取り込んでいった⁽⁵⁾。仏教ではヒンドゥー正統派やそれを取り巻く社会において否定的な意味をもつものを取り入れ、それに肯定的な意味を新たに付与することがしばしば見られる⁽⁶⁾。そこにはヒンドゥー正統派が否定的対象として蔑視し、嫌悪し、また恐れるものを敢えて取り込むことにより、ヒンドゥーとの違いを際立たせ、かつヒンドゥー側に衝撃を与えてそれに対抗する力をつけるという、したたかな意図があったように思える。本稿で

取り上げる葉衣観自在のモデルとなったシャバラ族のイメージもそのような意図から仏教に取り入れられたと想像される。

葉衣観自在の原語「パルナシャバリー」は、「木の葉を着けたシャバラ族の女」を意味し、シャバラ族のイメージをその基盤とする⁽⁷⁾。初期密教経典の『パルナシャバリー陀羅尼』にはパルナシャバリーが女神として説かれており、それは食肉鬼の女を意味する「ピシャーチー」や、不可触賤民の女を意味する「チャンダーリー」という語で呼びかけられている⁽⁸⁾。このことはパルナシャバリーの原初形態が畏怖すべきものであり、かつヒンドゥー正統派にとって否定的な意味をもつものであったことを示唆している。

その一方で、この陀羅尼には、パルナシャバリー女神が災難を除き病魔や鬼霊を退治する職能をもつことが説かれており⁽⁹⁾、女神は肯定的な意味を付与されている。このように、シャバラ族のイメージは、ヒンドゥー正統派にとって否定的な意味をもっていたが、仏教では除災に効能のあるパルナシャバリー女神として展開した。そしてさらにこの女神は観自在菩薩へと昇格し、葉衣観自在となった。

本稿では否定的な意味をもつものとして捉えられていたシャバラ族のイメージが仏教に受容され、如何に新たな意義をもつものとして創造されたのか、という視点から葉衣観自在の図像を取り上げたい。それによって山や森といった大自然の中にくらしていた種族に関して、ヒンドゥー正統派とは異なる仏教の捉え方を知ることができると思う。

なお仏教に取り入れられた二つのレヴェルのパルナシャバリーを区別し、女神としてのパルナシャバリーをパルナシャバリー女神、観自在としてのパルナシャバリーを葉衣観自在と呼ぶ。また「パルナシャバリー」という名称そのものはもっていないくとも、それに類する名称をもち、かつ図像学的な類似性からこの女神を基盤にして成立したとみられる観自在について

は、これを広い意味での葉衣観自在と捉えたい。

さて従来の研究、例えば飛鷹全隆氏の論考「パルナシャバリーについて」等によって、三面六臂の忿怒形のパルナシャバリー女神や一面四臂の寂靜な姿の葉衣観自在等が指摘されている。しかし広義での葉衣観自在を含めれば、これらの研究によっても未だ取り上げられていない図像があり、そこには仏教においてシャバラ族のイメージが如何に受容されたのかという問題を知る上で注目される点が見られる。

それは「シャバラ族の男のようなローカナータの観想法」（北京版『西藏大藏経』5106番）に説かれ、図像には二臂像と六臂像の二種がある。本稿ではこれらの図像に焦点をあて、従来の研究で知られているパルナシャバリー女神や葉衣観自在の図像と比較してその図像学的な特色を考察する。その上で、シャバラ族のイメージが、この観想法の図像において、如何に新たな意義をもつものとして創造されているのかという点について指摘したい。

さて、シャバラ族の男のようなローカナータの説明に入る前に、パルナシャバリー女神や葉衣観自在の図像学的特徴について、従来の研究で知られているものを含め、分類・整理し概観しておきたい。なお紙面の都合により、図像の詳細については割愛する。

2 パルナシャバリー女神の図像

仏教に取り入れられたパルナシャバリー女神には、次に述べる二臂像、四臂像、六臂像がある。

まず二臂像には少なくとも四例見い出される。その中の三例は、いずれも『バンチェンラマのサーダナマーラー』（通称リンヘン）所収の観想法に

説かれている。例えば131番の観想法の赤パルナシャバリーは、右手に金剛を持ち、左手で期剋印を示し、展左の脚勢をとる等、忿怒尊の姿をしている。また133番の黒パルナシャバリーは、斧と木の葉を持ち、展左の脚勢で死体をあさるカンカ鳥に住し、忿怒相を示す。さらに134番の緑パルナシャバリーは、寂靜な姿で孔雀の座に坐し、孔雀の羽と薬草の入った容器を持つ。⁽¹⁰⁾

一方チベット木版画図像集「諸尊諸菩薩聖像贊」には、焰髪で忿怒相を示し、三戟と木の葉を持ち、遊戲坐で坐す姿が描かれている。⁽¹¹⁾

次に四臂像には少なくとも三例見られる。例えばインド密教の観想法の集成である『サーダナマラー』(SM)のパッタチャルヤ校訂本148番に説かれた尊容の一つは、恐怖を呼びさます姿で、右手に各々金剛と斧を持ち、左手の一つで期剋印を示しながら羂索を持ち、もう一つで木の葉の束を持つ。⁽¹²⁾ また菩提流志訳『一字仏頂輪王經』⁽¹³⁾ 所説の尊容は、羂索、斧、宝葉を持ち、施無畏印を示す。さらに『リンヘン』132番の尊容は喜怒相を示し、右手で各々神木の枝と果実、斧を持ち、左手で羂索、払子を持つ。⁽¹⁴⁾

次に六臂像には少なくとも八例見られる。例えば SM 148番の尊容の一つは、三面で三眼を付け、阿閼仏の化仏を頂く。手の特徴には二臂像や四臂像にも見られた金剛、斧、羂索、期剋印、木の葉の束の他に、新たに弓と矢が加わる。また木の葉の束の衣を着け、足元には障害となるものを展左の脚勢で踏みつけている。⁽¹⁵⁾ 一方 SM 149番の尊容は、三面六臂で不空成就を頂く。持物、印相については148番と同様である。足元には病魔と死神を踏みつける。⁽¹⁶⁾

他方脚勢を除く手の特徴について、SM の六臂像とはほぼ同様のものが、『マヤージャーラ・マハータントララージャ』⁽¹⁷⁾ や『リンヘン』130番の尊容にもみとめられる。さらに手の特徴の一部や脚勢は異なるが、上述の⁽¹⁸⁾

SM の尊容に近いものが、「諸尊諸菩薩圖像贊」⁽¹⁹⁾ や慈寧宮、宝相楼旧所蔵のブロンズ像⁽²⁰⁾に見い出される。

さらにまた六臂像の作例にはダッカ博物館所蔵のものが二例あり⁽²¹⁾、これらはほとんど同様の姿をしている。三面で、右手に各々金剛、矢、鉤を持ち、左手の一つで期剋印を示し、残りの手で各々弓、木の葉を持つ。脚勢は展左で病魔や死神と推定される像を踏みつける。これらの圖像の特徴は概ね上述の SM の六臂像にも見い出される。

以上のごとく、パルナシャバリー女神には少なくとも二臂像、四臂像、六臂像がある。とりわけ SM に説かれた六臂像には、木の葉の束や衣等、森に住むシャバラ族を示唆する圖像学的特徴とともに、死神や病魔を足下に踏みつけ調伏する特徴が説かれており、救済尊としての性格が顕著に表現されている。

3 葉衣観自在の圖像

これまでの研究では二臂像と四臂像が知られている。まず二臂像には、少なくとも三例見られる。例えば不空訳『摂無礙大悲心大陀羅尼經』に、微笑し、右手で蕾の蓮華を持ち、左手で說法印を示す姿が説かれている⁽²²⁾。また胎藏現図曼荼羅の尊容は、右手で棒と左手で索を持つ。『覚禅鈔』の尊容は、右手に棒を持ち、左手で施願手（与願印）を示す⁽²³⁾。さらに『仏神靈像図彙』に収められた三十三観音の図では手のしぐさは不明であるが、観自在は木の葉の付いた衣を纏い、岩の上に坐す⁽²⁴⁾。

次に四臂像には五例程見られる。まず不空訳『葉衣観自在菩薩經』の姿は、天女形で、右手の一つで吉祥菓を持ち、もう一つで施願手を示し、左手で各々斧と羂索を持つ。これと同系統のものは『阿沙縛抄』⁽²⁵⁾、『覚禅鈔』⁽²⁶⁾、

『図像抄』⁽²⁹⁾ といった日本の白描図像集にも見られる。いずれも寂靜な姿で阿弥陀や無量寿仏の化仏を付ける。

このように葉衣觀自在には、いずれも寂靜な姿の二臂像と四臂像が見られる。

4 「シャバラ族の男のようなローカナータ」の図像

この觀自在は「シャバラ族の男のようなローカナータの觀想法」(チベット語名 'jig rten mgon po ri khrod pa'i sgrub thabs) に説かれている。觀想法は、北京版5106番に収録されているが、東北帝国大学法文学部編『西藏大藏經総目録・索引』や『ブトン仏教史』目録部⁽³⁰⁾には見当たらない。また觀想法の著者名、訳者名は伝わっていない。觀自在のサンスクリット名は、チベット文字で Lokanāthaśāwara と音写されており、サンスクリットとしては Lokanāthaśāvara に還元することができる。この名称に含まれる śāvara という語は śābara と同義であり、また śābara は śabara に由来する語であるので、⁽³¹⁾ śāvara はシャバラ族を意味するものと考えて差し支えないだろう。このことは、チベット名に見える ri khrod pa が śabara に対応する訳語⁽³²⁾であることから裏付けられる。なお Lokanātha はインド密教では、觀自在の別名として知られている。

このような名称から、この觀自在は、バルナシャバリー女神を男神へと転換し、さらに觀自在として昇格させたものと考えられる。このことは後で述べる図像学的な特徴からも支持される。

さてこの觀想法には二臂像と六臂像が説かれている。⁽³⁴⁾ 最初に六臂像が、次に脇侍を伴う二臂像が述べられている。

六臂像は三面で、各々の面は赤、緑、黄色である。右手に、金剛、斧、
— 162 — 葉衣觀自在の図像 (佐久間留理子)

剣を持ち、左手に、鈴、絹索、梵天の頭を持つ。また周囲は結界され、光の金剛の網や頭蓋骨に取り囲まれ、金剛槌で打たれている。さらに山と恐ろしい森があり、自らの家は木の葉と根が多く吊り下がる。

この三面六臂像は、先述したパルナシャパリー女神に見られる忿怒の姿の三面六臂像と類似する。例えば SM 148番の六臂像と比べれば、三面六臂であるという点の他に、その三面の中、二面が赤、黄色であること、また右手に金剛と斧、さらに左手に絹索を持つ点が共通する。なおパルナシャパリー女神に見られる木の葉の束や弓矢は、この観自在の持物にはないが、それらは、剣、鈴、梵天の頭に置き換わっている。また梵天の頭を持ち、頭蓋骨に取り囲まれると説かれているように、忿怒尊の性格をもつ。

このような諸特徴から、この観自在は、三面六臂の忿怒形のパルナシャパリー女神の諸特徴を部分的に抽出し新たな特徴を加え、観自在として作り変えたものではないかと考えられる。⁽³⁵⁾ またこの姿に、ヒンドゥー正統派にとって否定的な意味をもつシャバラ族のイメージを読み取ることができる。例えば梵天の頭を持つ点は、この観自在がヒンドゥーの対抗勢力であることを示唆している。また山や森、木の葉と根の吊り下がった家という諸特徴は、山地に住む種族であることを表わしている。

一方この観自在の姿には、病魔や死神を踏みつける脚勢は説かれていないが、三面六臂の女神と同様に、忿怒の姿で災禍となるものを降す救済尊としての性格をもつと考えられる。というのは、この観自在の観想法の後半に、病や毒といった災禍を降す真言が説かれているからである。⁽³⁶⁾

このように、この六臂の観自在はヒンドゥー正統派にとって否定的な意味をもつシャバラ族のイメージを基盤としながら、災禍となるものを降す救済尊としての性格をもつ。これは、上述した三面六臂のパルナシャパリー女神の延長線上にあるものと解される。

他方二臂像やそれを取り巻く女神にも、上述したパルナシャバリー女神と共通する特徴が見られる。

二臂像は頭は月や阿弥陀の化仏で飾られ、手には矢と弓を持つ。身体の色は白色で、十六才のようである。蛇の飾りや花と果実を混ぜた輪を付ける。また薄い芝（苔）で覆われた衣と上着と様々な宝石に飾られている。さらに鹿の皮で上半身を覆い、皮の座に坐している。

この姿には、薄い芝で覆われた衣と上着、蛇の飾りや花と果実を混ぜた輪、鹿の皮等に見られるように、蛇や鹿の住む山地にくらす種族のイメージが投影されている。またこの二臂像の矢と弓という特徴は、三面六臂のパルナシャバリー女神と共通する。

次に二臂像の観自在の左右には、各々二尊ずつ女神が説かれている。右には、空のように淡い青色をした春の女神と、白色をした夏の女神がいる。これら二尊は縄索と鉄の鉤を持ち、木の葉の衣を付ける。また左には、黄色の秋の女神と赤色の冬の女神とがいる。これらの二尊は、弓と矢を引き、孔雀の羽の飾りを付ける。

以上の四人の女神にも観自在と同様にパルナシャバリー女神の特徴が見られる。例えば春と夏の女神の着ける木の葉の衣はその典型的なものである。また春と夏の女神の持つ縄索や秋と冬の女神の持つ弓矢は、先に述べた四臂や六臂のパルナシャバリー女神の特徴に見い出される。³⁷⁾

このように、二臂像とその脇侍の女神たちもまた、パルナシャバリー女神の図像学的特徴を抽出して作られたものではないかと考えられる。しかし、そこには上述のパルナシャバリー女神には見られない特色を指摘することができる。それは、脇侍の女神たちが春夏秋冬という四季と関係づけられている点である。こうした四季の女神を伴う図像構成は、パルナシャバリー女神のみならず、葉衣観自在の図像やその曼荼羅にも例を見ないよ

— 164 — 葉衣観自在の図像（佐久間留理子）

うである。例えば『阿沙縛抄』に説かれる国王護持のために修される葉衣鎮宅法には、葉衣觀自在を中尊とする曼荼羅が知られているが⁽⁸⁹⁾、そこには二十八葉叉等の眷属が説かれているのみで、上述のような季節の女神は見い出されない。さらに SM 所収の觀自在の觀想法やインドの觀自在の作例にも現在のところ知られていない。⁽⁹⁰⁾

このように、二臂像は四季を象徴する女神を自らの分身である脇侍として取り込んだ珍しい図像構成をもつのであり、この点にシャバラ族の男のようなローカナータの図像学的特色が最もよく表われているようである。

5 ま と め

シャバラ族の人々のイメージは、仏教ではまず女神の姿に投影された。中でも病魔や死神を調伏するといった、肯定的な意味を付与されたシャバラ族のイメージは、三面六臂のバルナシャバリー女神に最もよく表われている。それは木の葉の束や衣を伴うだけではなく、弓矢等の武器を持ち、縄索を持って期剋印を示し、足下に病魔や死神といった障害となるものを踏みつけている。それは、忿怒の姿で災禍から人々を救う救済尊の職能を顕著に示している。

他方本稿で広義の葉衣觀自在として取り上げた、シャバラ族の男のようなローカナータの六臂像は、そのようなバルナシャバリー女神の姿や職能を色濃く反映している。また二臂像の姿にも六臂像のバルナシャバリー女神と共通する特徴がみとめられる。

その一方で、二臂像にはバルナシャバリー女神には見当たらない珍しい図像構成が見られ注目される。それは四季という自然の摂理を女神として象徴化し、觀自在の脇侍、即ち分身として位置付けたものである。これは

他の葉衣観自在やインド密教の観自在像にも例をみないようであり、このシャバラ族の男のようなローカナータの特色であるように思われる。

そしてまたこの図像構成は、シャバラ族の人々のイメージに四季という意味を新たに付与したものと考えられる。つまり四季を表わす脇侍の女神を統合するのは、本尊であるシャバラ族の男のようなローカナータであり、それはこれらの女神たちと同様に、循環的な自然の摂理を体現するものとみなすことができるからである。この点に、ヒンドゥー正統派にとって否定的な意味をもっていた山地種族のイメージを受容し、そこに新たな意義を創造していった仏教文化の革新的な一側面を見ることができる。

注

- (1) カウティリヤの『実利論』に、略奪者、破壊者としてのアータヴィカ(āṭavika)が説かれている。例えば、「林住族は自己の土地に住み、数も多く、勇敢で、公然と戦い、国土を奪い破壊し、国王と同等の性格を有する」(VIII, 4, 43) [宮坂 1971: 262] [上村 1984: 166]。また『実利論』には彼らに対する懐柔策や利用策も説かれている [宮坂 1971: 265-266 註(8)]。
- (2) [飛鷹 1967: 226] は、『マールカンデーヤ・ブラーナ』のパルジター註に「シャバラ族はドラヴィダやコーリヤ民族に従い、中央インドやデカン地方に居住した大変卑賤なる土着種姓である」と述べられていることを指摘する。また [宮坂 2002: 7] は、シャバラ族を、キラータ族やプリンダ族とともに非アーリア系の山地種族に分類する。なお『マハーバーラタ』(XII, 200, 39) には、シャバラ族の人々が、南方地域に住む者としてアーンドラやマドラ等の人々とともに挙げられている。
- (3) [山崎 1986: 290] は、カウティリヤの『実利論』に「『敵国軍』はアーリヤに指揮されているから、林住族軍よりもすぐれている」(IX, 2, 18) と説かれている点に注目し、林住族はヴァルナ制度を基礎とするアーリヤ社会の枠外に存在する異民族であると指摘する。また [岩本 1975: 199] は、シャバラ族の名は古く、『アーイタレーヤ・ブラーフmana』に見え、そこではダスユと記されていると指摘する。
- (4) 『マハーバーラタ』(XIII, 35, 17-18) にはシャバラ族の人々が、ドラヴィダやキラータ族等の人々とともに、シュードラの地位におとしめられたと説

かれている。

- (5) 例えば [宮坂 1971: 251] は、原始仏教教団には、アーラヴァカ (ālavaka), アーラヴィカー (ālavikā) と形容される比丘, 比丘尼, 優婆塞がおり、彼らは林住種族出身であったと想定する。また [宮坂 1971: 265] は、林住種族の容貌である青黒色の肌, 極悪相, ナーガの装飾等が、大元帥明王像に取り込まれたと指摘する。
- (6) 例えばヒンドゥー神話『女神の偉大さ』では、水牛はドゥルガー女神に退治される魔神として登場するように、ヒンドゥー正統派にとって否定的意味をもつ。一方水牛の頭は仏教タントリズムの尊格の一つである金剛パイラヴァの顔に取り込まれている [立川 2002: 137-138]。
- (7) [頼富・下泉 1994: 232]
- (8) [岩本 1975: 209]
- (9) [岩本 1975: 207-208]
- (10) これらと同様の姿は、チベット『五百尊図像集』の木版画にもみられる [Tachikawa 2000: 262, 264, 265]。
- (11) [Clark 1965: 287 (no.250)]
- (12) [Bhattacharyya 1968a: 197] [頼富・下泉 1994: 232-233]
- (13) 『大正大蔵経』no.951.
- (14) これと同様の姿は、チベット『五百尊図像集』の木版画にもみられる [Tachikawa 2000: 263]。
- (10) [Mallmann 1986: 300-301] [Bhattacharyya 1968a: 196] [頼富・下泉 1994: 232-233]
- (16) [Mallmann 1986: 300-301] [Bhattacharyya 1968a: 196] [頼富・下泉 1994: 232-233]
- (17) 東北大学法文学部編『西蔵大蔵経総目録・索引』466番。[飛鷹 1967: 701]
- (18) これと同様の姿は、チベット『五百尊図像集』の木版画にもみられる [Tachikawa 2000: 261]。
- (19) [Clark 1965: 287(no.249)]
- (20) [Clark 1965: 207(6B3)]
- (21) これらの一つは [Saraswati 1977 pl.188] [Banerji 1981: pl.XXXIX(b)] [中村 1988: 682] [頼富・下泉 1994: 232] に、もう一つは [Saraswati 1977 pl.189] に図版が紹介されている。
- (22) 『大正大蔵経』no.1067, vol.20, p.134b.
- (23) [石田 1975: 101]

- (24) 『大正大藏經圖像第四卷』 図像 No.180.
- (25) [伊藤 1987: 53]
- (26) 『大正大藏經』 no.1100, vol.20, p.448b. 図像学的特徴は [飛鷹 1967: 710] に言及されている。
- (27) 卷第九十三, 『大正大藏經圖像第九卷 (二)』 図像 Nos.37, 38.
- (28) 卷第五十五, 『大正大藏經圖像第四卷』 図像 No.179.
- (29) 石山寺所蔵十卷抄第七卷。[鷲尾 1988: 図69]
- (30) [西岡 1983]
- (31) [Monier-Williams 1982: 1068]
- (32) [Monier-Williams 1982: 1065]
- (33) [Lokesh Chandra 1959: 2241]
- (34) Lu 140b5-141a3.
- (35) なお、この三面六臂の観自在の持つ斧や絹索は、漢訳經典や日本の白描図像集に知られる寂靜な姿の四臂の葉衣観自在にも見られる。しかし、全体的にみれば、この三面六臂の観自在は、この四臂の葉衣観自在よりも三面六臂のパルナシャバリー女神と多くの共通点をもつ。
- (36) Lu 141a6-7 に病を治す真言 (om āḥ hrīḥ sarvavyādhi pratiharana hūṃ phaṭ svāhā) と毒を鎮める真言 (om āḥ hrīḥ maṃ nāgaviṣa hūṃ phaṭ svāhā) が説かれている。
- (37) SM 148, 149番, 『一字仏頂輪王經』, 『リンヘン』 131番の四臂像に、絹索が見られる。また弓矢は, SM 148, 149番, 『マールジャラ・マハータントララージャ』の六臂像に説かれている。
- (38) 『大正大藏經圖像第九卷 (二)』 pp.207-208.
- (39) バッタチャルヤ校訂本 [Bhattacharyya 1968b] の6-43番に所収。また SM には、この校訂本に未収録の観自在の観想法もあるが [Sakuma 2002: 134-143, 155], それらにも説かれていない。
- (40) [宮治 2001: 13-72]

参考文献

- Banerji, R. 1981 *Eastern Indian School of Mediaeval Sculpture*. Archaeological Survey of India, New Imperial Series Vol. XLVII, Delhi: Manager of Publications.
- Bhattacharyya, Benoytosh 1968a (1924) *The Indian Buddhist Iconography*. Calcutta: Firma K.L.Mukhopadhyay. (Reprint of Second Edition 1958); 1968b (1925) (1928) *The Sadhanamālā*. 2vols. Gaekwad's

- Oriental Series vols. 26, 41, Baroda: Oriental Institute.
- Clark, W.E. 1965 *Two Lamaistic Pantheons*. New York: Paragon Book Reprint corp.
- 逸見梅栄 1960 『観音像』 誠信書房。
- 飛鷹全隆 1967 「バルナシャバリーについて」『印度学仏教学研究』15(2), pp.699-702.
- 石田尚豊 1975 『曼荼羅の研究』(研究篇) 東京美術。
- 伊藤武美 1987 復刻『仏神霊像図彙』 同時代社。
- 岩本 裕 1975 『仏教聖典選第七巻 密教経典』 読売新聞社。
- 上村勝彦 1984 『カウティリヤ実利論』(上下) 岩波書店。
- Lokesh Chandra 1959 *Tibetan-Sanskrit Dictionary*. New Delhi: International Academy of Indian Culture. 1974 (reproduced) *Sadhana-mala of the Panchen Lama*. part I, New Delhi: International Academy of Indian Culture.
- Mallmann, Marie-Thérèse de 1986 *Introduction a l'Iconographie du Tantrisme Bouddhique*. Paris: Librairie d'Améique et d'Orient.
- 宮治昭(篇) 2001 『観音菩薩像の成立と展開』 シルクロード学研究 Vol. 11.
- 宮坂宥勝 1971 『仏教の起源』 山喜房仏書林。2002 『ブッダの教え スッタニパータ』 法蔵館。
- Monier-Williams, Monier 1982 (1899) *Sanskrit-English Dictionary*. Oxford: Oxford University Press.
- 中村元編著 1988 『図説仏教語大辞典』 東京書籍。
- 西岡祖秀 1983 「『ブトウン仏教史』 目録部索引 III」『東京大学文学部文化交流研究施設研究紀要』 第6号 pp. 47-200.
- Sakuma, Ruriko 2002 *Sādhana-mālā: Avalokiteśvara Section Sanskrit and Tibetan Texts*. Asian Iconography Series III, Delhi: Adroit Publishers.
- Saraswati, S. K. 1977 *Tantrayāna Art*. Calcutta: The Asiatic society.
- Sukthankar, V. S. (ed.) 1954 *The Mahābhārata*. B. O. R. I.
- 鷲尾隆輝(監修) 1988 『図像抄 石山寺所蔵十巻抄』 法蔵館。
- Tachikawa, Musashi/ Mori, Masahide/ Yamaguchi, Shinobu 2000 *Five Hundred Buddhist Deities*. Asian Iconography Series I, Delhi: Adroit Publishers.
- 立川武蔵 2002 『シヴァと女神たち』 山川出版社。
- 山崎元一 1986 『古代インド社会の研究』 刀水書房。
- 頼富本宏・下泉全暁 1994 『密教仏像図典』 人文書院。

『影印北京版西藏大藏經』Vol. 87, 鈴木學術財団。

追記 本稿は、発表原稿に加筆、修正を加えたものである。なお、本稿は葉衣観自在の図像について、文献資料を中心に考察したものである。本文で取り上げた作例については遺漏もあろうかと思われるが、それらについては今後の課題としたい。

謝辞 加藤純章先生（前名古屋大学教授）、廣澤隆之先生（大正大学助教授）には、貴重な御意見を頂きました。記して感謝いたします。